

大山街道トーク&フォーラム 議事録

日 時 平成22年11月14日(日) 13:30~16:30

会 場 大山街道ふるさと館2階イベントホール

参加者 約50名

【開会】

司会(小林しのぶ): 大山みちまちウィーク最終日を迎える。これまでの盛況に感謝したい。司会自己紹介。

【高津区挨拶】

栗山副区長:(開会の挨拶) 今月7日からふるさと館を実験的に活用。期間中、子ども達の参加が多くみられた(サッカー、まちあるき、灯籠づくり等)。なかでも灯籠づくりは非常に良かった。ユビキタスについては、多くの学生達がまちを歩いてくれた。円筒分水や岡本太郎の講演にも多くの方にご参加いただいた。ジャズライブも盛況。成果としては幅広い年代の人が集まった。実は私は大山街道にとっても思い入れがある。大山街道には市が設置した歴史ガイドパネルが19ヶ所設置されているが、今から29年前に私が担当した。各専門家が加わった設置委員会でパネルの設置に向けて楽しく議論して進めていった。ガイドパネルのポールについては、アルミ製の鋳物でできており、丈夫なつくりになっている。ポールの一番上の部分のマークは、歴史ガイドのシンボルマークであり、委員会の1人として参加していたグラフィックデザイナーの栗津潔氏がデザインしたもの。コンセプトは歴史を移す鏡。古代の鏡をモチーフにしてデザインしたもの。

大山街道みちまちウィークのフィナーレを迎えるトーク&フォーラムに、多方面から多忙のところ、多くの方が集まってくれたことに感謝したい。多くの取り組み事例から意見交換し、各地域間で交流できる機会になるとよい。その結果、大山街道でつながり、全体的に盛り上がる機会になればよい。

【プログラムの紹介】

司会(小林しのぶ): 前半は各地のまちづくりや取り組みの事例紹介を(大山をつなぐ、大山でまちを元気にするというテーマ)、後半はワールドカフェ形式でフランクに交流しながら意見交換をします。

【パネリストとコーディネーターの紹介】

司会(小林しのぶ): パネリストとして伊勢原市観光協会市川清美氏、二子玉川小学校PTA会長江口響子氏、用賀まちづくり株式会社平井夏子氏、大山みちの会代表竹澤新治氏、大山街道

活性化推進協議会委員長島崎光順氏、コーディネーターの明治大学小林正美教授を紹介。

【各地区のまちづくりや取り組みの紹介】

伊勢原（伊勢原市観光協会市川清美）：大山のゴール地点である伊勢原市。大山とはどういう所なのか紹介をしたい。標高1251.7mの山で、丹沢山塊の東端、伊勢原・厚木・秦野の3市の境界線にある。均整のとれたピラミット型の姿は、関東平野一帯から、また、相模湾からも見ることができ、漁をしている人達の目印になった山でもあった。日本三百名山の1つに数えられている。大山の信仰の歴史は縄文時代後期から始まったと考えられており、山麓に住む人々は大山を異世界と考え、人が死ぬと靈魂は大山に飛んでいき、お盆になると大山から下りてくると信じていた。大山は人々と神々の世をつなぐ連絡路と考えられていた。奈良時代末、奈良東大寺別当良弁僧正が山頂を開いた後は、修験道場として栄え、多くの山伏達が修行に励んだという。普通の人には考えられない荒行の数々に、里の人は天狗が化けて修行しているのだと言って「山伏天狗」と呼び習わした。江戸時代には、関八州。西に大山、東に筑波と言われた大山は、関東だけでなく、福島、長野、静岡まで霊験あらたかな山としてその名をとどろかせた。雨乞いの霊場であったほか、豊作、豊漁、と海上守護、厄除けなどが祈願され、武士、農民を問わず幅広く信仰されてきた。また、江戸の人々の間では、この山に登ってこなければ、一人前の男として認めないという風習もあったので、盛んに登られたようだ。そのため、江戸から伊勢原への道は大山街道として賑わい、大山講の御師の家々が立ち並んでいたという。今ではこま参道沿いにその面影を残し、先導師旅館や土産物屋が軒を並べている。大山では旅館組合があり、商店等が100軒程度あるが、サラリーマン世帯も増えているようだ。大山街道沿いでの交流については、これまで観光協会です土産物の販売を行ってきた。2月の大山街道フェスタだけでなく、高津区民祭にも参加要請をいただき、みんなで楽しませてもらった。毎年大山街道フェスタに参加し、毎年その日を楽しみにして寄って来てくれる住民の方々との交流も楽しみにしている。二子玉川や用賀との交流もできてきた。今後もこのような交流に参加して、関係を深めていきたい。

二子玉川（二子玉川小学校 PTA 会長江口響子）：小学校6年生の時、遠足で大山に登ったのが遠い記憶。今回二子玉川では、地域で支える子どもと歴史というテーマに絞った。二子玉川周辺の大山街道は、瀬田・用賀辺りで2本に分かれ、二子玉川小学校の先でまた1本になる。3回目を迎えた大山みちフェスティバルは台風の中、体育館や校舎内で賑わい、楽しく過ごせた。本場大山のコマ名人を迎え、コマ教室・コマ回し大会を行った。“プチ大山詣”と称し、駕籠（かご）体験も日大相撲部に協力してもらい行った。大山みちをまたぐ丸子川（次大夫堀）に架かる治大夫橋が、子ども達や地域のデザイナーの作った絵タイルで飾り付け、新たに生まれ変わった。指導講師を呼び、縁台将棋というものも行った。また、「大山デジタル紙芝居」というものを作った。PCを使って紙芝居形式で話を聞かせるもので、話は隣に座られている平井さんに考えていただいた。昨年、「大山てくてくマップ」というものを作り、白地図の書かれた模造紙に、「こうしたい、こうだったらいい」という夢を子ども達に書き込んでもらった。大山に実際

に行ったことの無い子どもも多く、思いがけない絵を書く子もいたが、それはそれで楽しい時間だった。PTA 主催の Futako フェスタ（大山みちフェスタと同時開催）では模擬店やスタンプラリーを行った他、バトントワリングも行った。障害者も健常者も誰でも参加できるペタンクや輪投げも同時に行った。大山街道沿いの地域対抗の「大山みち少年サッカー交流大会」は、先日高津でも行われたが、今後伊勢原でも行う予定だ。子ども達はマナーも良く、学校以外での学びの場にもなっている。大山みちフェスティバルの際に「大山灯ろう」を商店街に飾っているが、コツコツ作ってきたことでかなりの数が貯まってきている。子ども達の作った灯籠は、伊勢原市観光協会の協力により、大山火祭薪能へ向かう橋に展示された。“大山みち”という縁で、伊勢原・高津・用賀と、世界が広がってきているように思う。その一つとして、大山みちをみんなで歩き、おしゃべりしようという「大山みちウォーク&トーク」という企画を今年の6月に行った。また、「二子玉川ものしりマップ」というものを作成した。駅前の再開発によって新しく住まう方々を、地域としても暖かく迎える為に、歴史や地域のことが分かるマップを作成した。二子玉川はおしゃれな街という印象もあるが、古き良き時代というものも残っており、そういった所も紹介したい為、地元だからこそ知っている情報を掲載した。当初の想定を上回ってマスコミにも注目され、新聞にも紹介された。最初は新住民に向けたものとして作成したが、嬉しいことに、二子玉川小学校で小学生の総合学習の補助教材として使われることになった。二子玉川小学校の前を通る大山みち、地域に支えられた活動は子どもと歴史を核として、これからも未来に向けて続いていくと思う。

用賀（用賀まちづくり株式会社平井夏子）：用賀の大山に関する活動について紹介。用賀では「大山道場」という活動をしている。月一回集まって勉強会を行っており、用賀や大山の歴史を語り継ぎ、継承していくために始めた。平成20年度からはじまったもので、今年で三年目。一年目は基本的なことで、まち歩きや勉強からはじめたが、大山に行ったことのない人も多く、専門家の人と一緒に実際に行き行って体感してみた。二年目は、形にするということで、まちを散歩してほしいという主旨で手元にあるマップを作成した。特徴としては、江戸時代の地図から現在の地図までを比較して変遷でみられること。裏面の写真は実際に大山道場に参加している人が分担して撮影してきたもの。用賀は高津のような宿場町ではなく、多摩川が氾濫したときに水が引くまで用賀で宿を取ったりしていた。最後にはマップを用いてまち歩きを行った。今年は、語り部を養成していこうということで、専門家の話を蓄積している。以上のように、語り部の養成といった教育目的で始めたもの。用賀商店街（まちづくり会社）としても大山と絡めて事業を進めていきたいという思いも持っている。商店街ではクーポンマガジンや、用賀のサルスベリ等の地域の資源を取り入れたキャラクターをつくった。こういった取り組みのなかで地域おこしをしていきたいと考えている。

高津（大山街道活性化推進協議会委員長島崎光順）：電車やバスがなかった時代、矢倉沢往還や多摩川の宿場としての立地に恵まれ、多くの人が集まった。電車やバスの発達により、人の動きや流れが大きく変わり、駅周辺に商店が集中した。大山街道は田園都市線沿いの比較的好立

地で、マンション街道という形に移り変わろうとしている。固定資産税も高く、商売が傾いてきたらマンションにしてしまうのは仕方のない側面がある。そういった背景と危機感のもと、青年会議が40年前にでき、大山街道を盛り上げていく為に、高津区民祭をはじめた。高津区のさまざまな催し物を一日でやろうという試み。区民祭の歴史は37年。近年、大山街道が見直されてきたのは、市の力添えが大きく、平成15年4月に活性化推進協議会が発足。平成16年の2月に第一回大山街道フェスタを開催。今年度は2月20日を予定（8回目）。大山街道は、昔は中心的な場所であったが、時代の流れの影響を受けた。しかし、駅からそこまで遠くない立地のため、なんとかできるはずということで、商店等に閑古鳥のなく冬場にイベントを企画した。平成21年には、活性化推進協議会や市の協力によりアクションフォーラムが立ち上がり、そのなかでは、若い人や違った観点を持っている人にアイデアを出してほしくてはじめたのが「大山みちまちウィーク」。広報面では足りない部分もあったが、それでも多くの人に集ってもらい、非常に感謝している。ユビキタス等も私には難しいが、若い人達が、角度の違った視点で新しいことをはじめてくれたことが本当にありがたいと思っている。この一週間のさまざまな人の協力に感謝したい。

大山みちの会（大山みちの会代表竹澤新治）：大山みちの会は6年前に発足し、現在は50人以上の人が年会費を払っている。会には会則がなく、総会も行っていない。会員は多くの地域から参加してもらっており、人材は比較的多い。地元広報誌にも活動を掲載してもらい、伊勢原との交流がある。各地域に広報誌を配布している。広報誌や会報の作成も会員がボランティアで作成している。大山が大山街道にとって一番重要な物で、これを忘れてしまうと本当の意味での活性化ができないと思っている。その他にも、神社でのコンサートや納め太刀、ステッカーを貼るといような活動をしている。大山の歴史を支えているのは大山寺と阿夫利神社であり、文化でもある。大山が活性化しないと大山街道は活性化しない。地域の商店が繁盛することが活性化でなく、歴史等がよみがえることで大山街道がよみがえってくる。それが本当の意味での活性化だと思う。大山街道がどういう状態になればつながったといえると思うか。イベントの情報交換だけならインターネットだけでできてしまう。大山のことを良く勉強して大山がどういうものを理解してからつながることが重要。ぜひもう一度原点に立ち返って大山街道の活性化を考えてもらいたい。

【大和市下鶴間ふるさと館の取り組みの紹介】

佐藤：大山みちの会の竹澤氏と交流があり、大山街道すごろくをきっかけにつながりが強くなった。（パンフレットの写真を用いて写真の解説）当館は解体して復原した物であり、本来なら道の際に建っていたが、若干南に移動した。大山みちの会の竹澤氏が紹介したステッカーも貼ってある。高津近辺と比べると下鶴間の方は性格が違う。下鶴間は国道16号や246号の通り抜けで、車の往来が非常に激しい。商店は米屋や床屋、コンビニ程度でほとんどみられない。当館は県内でも数少ない商家建築の建物になっている。当館が中心となってやっていることは、主には年中行事があげられる。12月8日と2月8日に一つ目小僧に関する行事を行っている。

他にも5月の節句、七夕祭り等で地域の方々とふれあうというような活動をしている。

【パネルディスカッション】

小林教授：いろいろな地区が連携しないとできないことがあると思う。行政団体がバラバラだとだめ。民間やNPOなども含め横に繋がる必要がある。例えば大山検定をすとか、みんなで大山詣をするということもあるし、それをニュースにするということも考えられる。今こうして集まっているのも大山街道の力ということだ。このエネルギーをどこかでうまく使うということを考えていく必要があるのではないかな。

市川：ゴール地点になる伊勢原としては、来る人をお迎えするという気持ちでいる。以前行った大山ウォーク&トークもそうだが、持ち回りでイベントを開催して各地域のことを知り、ある時は皆で各土地や大山を巡るなど輪が広がれば、それが現代版の大山詣になるのではないかな。各地を巡る中で、他の地域の人間だからこそ良い点、悪い点それぞれに気づくこともあると思うので、それを各地域のまちづくりに活かしていければ良いのではないかな。

江口：豆腐料理のお店が大山には多い。二子玉川地域では元々農が盛んだったが、雨乞いをする為に大豆や米を奉納していたし、また、おいしい水を元に豆腐が作られた経緯もある。体にいい食事というのが1つのキーワードになると思う。また、二子玉川では再開発が行われており、それはそれでいいが、手つかずの自然への憧れも同時にある。「食文化と自然」をキーワードにできると良いのではないかなと思う。

平井：用賀は地域との交流というのはまだまだこれからだが、道場の有志や日本トラベルのツアー等で興味を持って、大山まで歩いてみようという企画を行っているし、実際に歩いている人も多い。その歩く過程の中で、地域のスペースにも立ち寄っていただき、その地域の方々と交流することも楽しいのではないかな。

島崎：歴史を知ること重要だが、それにプラスして横のつながりの中で象徴的な物を統一してつくっていくことで連携ができてくると思う。例えば納太刀を担いだゆるキャラを作り、伊勢原なら伊勢原の特徴を付加したものを販売するといったつながりもあるのではないかな。そのようにして本当の連携が出来てくれば、もっと楽しい大山街道になるのではと思った。

竹澤：みちの会はこれまでも多くの人に支えられてきた。高津もそのひとつ。ステッカーに記載された名称を切ってくださったのは区の方だ。なかなかできることではない。これからも高津の人とさまざまな取り組みをしていきたい。

小林：様々なキーワードが出た様に思う。大山街道に行くとパワーをもらえるという、ある種のブランドを全国に発信していけるとおもしろいと思う。

岡野（会場から）：竹澤氏にお願いがある。はじめから強いつながりを求めるのは難しいので、まずは大山に関わる団体の一覧表（団体名、代表者名、連絡先等の記載）をつくってほしい。

竹澤：会のメンバーのなかにデジタルに強い人もたくさんいるので、つくってもらえるようお願いしたい。

小林：みちまちウィークをやってみて、音楽のできる人やITに詳しい人がこんなにいるとは思

わなかった。こういった機会に多くの発見ができることもひとつの魅力である。

～休憩～

【ワールドカフェ】

千葉：(ワールドカフェの主旨説明)「ワールドカフェ」という手法を使って交流を図っていきたい。ワールドカフェは席を何度も移動するものなので、ご協力をお願いしたい。ワールドカフェとは、知識や知恵が生まれるのは会議室でなくカフェの様な空間で初めて生まれるという発想から始まった。今日のテーマは「私たちが盛り上げる！大山街道でできることを語ろう」ということ。語る中で「私大山街道でできること」を自分で持ち帰ることができれば成功と考えている。

～話し合い～

千葉：みなさんがまとめたシートの中で、いくつかのアイデアを紹介したい。また、このアイデアは、こちらで一旦まとめて、みなさんにお返ししたい。

○大山水運びレースという大会を地域で行う。賞品には商店街の物を。大人同士でつなげる演目を。

○屋台村をつくる。街道沿いに屋台を並べてはどうか。また、土日は車を一方通行にするなどして、歩きやすい空間をつくってはどうか。賑わいの演出を。

○かつて雨乞いが行われていた大山を、現代では「エコの山」という視点で見ることが出来るのではないかと。水や雨がどれだけ重要かを子ども達に分かるようにレクチャーする。信仰までいなくても、神奈川県の大きな部分を占める水道水の元になるという視点で捉え直すと、山への愛着も生まれるのではないかと。

【まとめ】

小林教授：(トーク&フォーラムのまとめ)机を見ると様々なことが書かれている。みなさん場所を変えることで色々な人と交流が出来ており、堅苦しいワークショップを行うよりも楽しく議論できたのではないかと。きっとこの中に素晴らしいアイデアがちりばめられているはず。例えば「エコの山」という話があったが、お寺などと現代のテーマを絡めたストーリー性のあるまちづくりを作っていく中で、全体の繋がるプラットフォームのようなものができればよいのではないかと思った。今日の内容だけではまとまりはないが、次にやるべきことを考えていきたいと思わせる会だった。

【閉会のあいさつ】

島崎：(みちまちウィーク終了の挨拶) 実質8日間、様々なかたちで大山街道に関わってくれてありがとうございました。大山みちまちウィークは今年始めてで、暗中模索の中に進められ

た。しかし、これだけの成果が上がったのだと強く感じられた。これからも新しい感覚、違う角度からさまざまな意見をいただきたい。本当にありがとうございました。

以上